

令和6年度 八坂小中学校経営方針

1 八坂小中学校 経営ビジョン

【目指す人間像】 「自分が好き」と言える子ども
～自己有用感の育成～

【教育理念】 「広げ、深め、高め合う」学校

【学校教育目標】 「問い」をもって学ぶ八坂の子

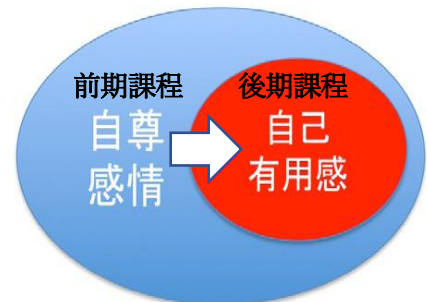
【目指す人間像】 「自分が好き」と言える子ども 自己有用感の育成
～ 義務教育9年間で育てる姿 ～

「自分が好き」と言える「自己有用感」は、社会性の基礎となるものです。人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれ、社会生活の基盤となるため、現行の小中学校の学習指導要領にも、異年齢集団等による「交流活動」の重要性が盛り込まれています。

また、「人とかかわりたい」と思う気持ちは、自らの体験によって獲得されます。他の子どもと一緒に遊んだり、活動したりすることを通して、「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるころから「人とのかかわり」が始まります。それが、「社会性の基礎」を形作っていくと考えられています。「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた等、相手の存在なしには生まれてきません。

そこで、前期課程（1～6年生）では、「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることを通して自尊感情の基盤を構築し、さらに後期課程（7～9年生）になるにつれ、そうしたかかわりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇り（自己有用感）の獲得を目指していきます。

「学び合いの里 八坂」と共に歩む精神のもと、子どもの多様性や個性をまるごと包みこみながら、「問い」をもって物事の本質を探究し、協働しながら学び合う授業実践を根幹として、「自分が好き」と言える子どもの育成を目指します。



【教育理念】 「広げ、深め、高め合う」学校

～「対話的な学び」を根幹とする学校・「多様性・個性」を包みこむ学校～

新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程の実現」が重要視されています。昭和51年に全国初となる山村留学生の受け入れを開始した八坂地区は、平成27年に「文科型コミュニティ・スクール」となり、学校運営協議会制度にもとづく学校づくりを進め、地域と学校が一体となり地域の願いや地域の活性化の一助としての側面を大切にしながら、子どもの育成及び学校経営を行ってきました。

さらに、近年では「授業を根幹とした学校づくり」を学校と地域が共有し、八坂小中学校共に協働的な授業づくりを進めてきました。その結果、「教える教師からの脱却」へと教職員の授業観が変容し、子ども達は友と知恵を出し合い問題を解決することに喜びを感じつつあります。

このような経過を踏まえ、令和元年度の学校運営協議会では「学び合いの里 八坂」を合言葉に、学校と地域が協働しながら小中一貫教育（八坂オリジナルな教育）を創造し、子どもも大人も共に、「協働する力」や「自己有用感」をさらに伸ばして学び合うことを決意しました。

さらに、令和5年度からは八坂小中学校の教育理念を『「広げ、深め、高め合う」学校』とし、「対話的な学び」を根幹とする学校づくり及び「多様性・個性」を包みこむ学校づくりを通して、「自己有用感」や「協働する力」を育むための義務教育9年間の教育課程を編成し、子どもたちが新しい時代を生き抜く力の育成を目指します。

※「対話的」な学びとは・・・

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子どもや、子ども同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。そのような「対話的な学び」の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的・積極的に設ける学びのこと。

【学校教育目標】 「問い」をもって学ぶ八坂の子

～体験や人間力の豊かさを基盤としたICTの有効活用（教育課題）～

※人間力・・・創造性・発想性・愛情などの人間でなければ持ち得ない力

八坂小中学校では、施設分離型の環境を最大限克服し、6・3制を基本とした発達段階に配慮したカリキュラムを開発して学校づくりを行い、9年間の学びをつなげていきます。

まず、「対話的な学びを根幹とした学校づくり」の具現に向け、『問い』をもって学ぶ八坂の子」を学校教育目標として継続し、子どもたちが興味関心を高め、追究意欲を喚起するような事象・対象との出会いから、自ら問題意識（「問い」や「願い」）をもち、追究する問題（「学習問題」）を明確にした授業づくりを目指します。

また、「体験や人間力（創造性・発想性・愛情など）」の豊かさを基盤としたICTの有効活用を教育課題としながら、各自の問いや考えをリアルタイムで共有して対話を活性化させたり、データ蓄積により自分の考えの深まりを評価したりするなどの活動を積極的に取り入れます。そのため、1～6年（前期）では端末機器を操作する力を身に付け、7～9年（後期）では、前期での経験を生かした協働作業等、新たな価値を創造するための学習の場を設定していきます。

21世紀を生きる子ども達が学び続け、より良い人生を送るためにはICTの活用は必要不可欠です。今、文科省のGIGAスクール構想により教育現場では一人一台タブレットを活用する時代が訪れました。ここ八坂がICT活用の先進地となり、多くの子どもが最先端の教育を享受して育つことを目指します。

＜八坂オリジナルな教育の一例 ～6年理科「魚の体のつくりと働き（解剖）」から～＞

※八坂オリジナルな教育とは・・・

義務教育学校・小規模校の利点を最大限生かし、体験から学ぶ、地域・自然から学ぶ、地域講師から学ぶ、交流活動から学ぶ、学習支援ボランティアから学ぶ、八坂のよさ・伝統文化から学ぶ、多様な見方・考え方から学ぶ等の「アナログ・リアル」と、「ICT・デジタル」を最適に組合せた教育。



- 「アナログ・リアル」と「ICT・デジタル」の融合
- ICT（一人1台端末）の有効活用
学びの足跡、情報共有
- 兼務教員の活用
- 地域素材の活用
- 伝統文化の活用
- 地域ボランティア人材の支援・活用
- 山村留学生・特認校生の受入れ 多様性から学ぶ

※ICT：情報通信技術（Information and Communication Technology の略）

※GIGAスクール構想：2019 文科省 小中学生に一人一台の端末を配布⇒ デジタル化対応環境整備

【義務教育9年間で目指す姿】 自己有用感の育成

「自分が好き」と言える子ども

【教育理念】

「広げ、深め、高め合う」学校

※「合う」・・・子ども、保護者・地域、教職員が相互に結び合う関係

- 「対話的な学び」を根幹とする学校（学びをつくる）
- 「多様性・個性」を包みこむ学校（関係をつくる）

経営概要

【八坂小中学校 義務教育9年間のねらい】

「広げ、深め、高め合う」学校づくりと、対話を基盤として多様性・個性を認め合い、子どもが「問い」をもって学ぶ授業実践を通して、生涯にわたって協働しながら新たな価値を創り続ける力を養い、「自分が好き」と言える子どもを育成する。

【学校教育目標】

「問い」をもって学ぶ八坂の子

～体験や人間力の豊かさを基盤としたICTの有効活用（教育課題）～

※人間力・・・創造性・発想性・愛情などの人間でなければ持ち得ない力

【重点1】学びづくり

子どもが問題意識（「問い」や「願い」）をもち、クエスチョン（W）型や、**結論の根拠や理由を問う等の学習問題を積極的に設定し**、見方や考え方の「ちがい・ズレ」及び共通点を共有することを通して、対話の質を高める。

【重点2】関係づくり

地域の方との協働、異学年との交流活動、自律的・対話的に学び合う授業を通して、**聴き合う関係・「助けて」と言える関係**を構築し、多様性・個性を認め合う。

【重点1・2】を支える教育システム

① 義務教育9年間学習システム

全ての教科領域で9年間を見通したカリキュラムを作成する。また、教育課程を前・後期課程で編成し、前期課程の学習指導も一部教科担任制で行い、後期課程では複数担任により生徒一人ひとりの個性・多様性に応じた支援を行う。

② 地域協働システム ～「学び合いの里 八坂」と共に歩む～

学校運営協議会との協働により「地域に開かれた教育課程」を編成し、地域と共に生きる八坂の子どもを育成する。

③ 教職員研修システム

前期・後期課程の教職員が授業を相互に参観し、**子どもの学びを語り合う**ことを通じて、授業力の向上を図る。 ※「村瀬公胤先生（麻布教育研究所長）授業クリニック」

2 八坂小中学校 学校経営の具体

(1) はじめに（義務一貫教育の経緯とねらい）

「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」一部抜粋 H28.12.26 文部科学省

・・・平成27年6月通常国会で、9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の種類である「義務教育学校」の設置を可能とする改正学校教育法が成立し、平成28年4月1日より施行されました。

それにより、小学校と中学校が別々の組織として設置されていたことに起因していた様々な実施上の課題が解消され、教育主体・教育活動・学校マネジメントの一貫性を確保した取組が容易になるなど、全ての教職員が義務教育9年間に責任を持って教育活動を行う小中一貫教育の取組を継続的・安定的に実施できる制度的基盤が整備されました。

小学校と中学校は、児童生徒の発達段階に応じて教育活動が異なるため、指導体制や方法などの様々な違いが、学校の文化として積み上げられてきました。このため、単に小学校と中学校を組織として一緒にするだけでは成果を上げることはできません。大切なことは、義務教育9年間に連続した教育課程として捉え、児童生徒・学校・地域の実情等を踏まえた具体的な取組内容の質を高めることでもあります。・・・

【八坂小中学校 義務教育9年間のねらい】

「広げ、深め、高め合う」学校づくりと、対話を基盤として多様性・個性を認め合い、子どもが「問い」をもって学ぶ授業実践を通して、生涯にわたって協働しながら新たな価値を創り続ける力を養い、「自分が好き」と言える子どもを育成する。

(2) 学校経営の重点

21世紀の教育では、自ら「問い」を発する力が学力の中核となります。なぜなら唯一絶対の正解が用意されていないこれからの時代を生きていくためには、自ら「問い」を持ち、他者と協働しながら「最適解」「納得解」を得る力が不可欠だからです。

そのため、八坂小中学校では、学校教育目標を『『問い』をもって学ぶ八坂の子』とし、その具現に向け、以下を重点に取組みます。

重点1 学びづくり

児童生徒にとって魅力的な学習問題を据え、子どもの問いを大切に探究することにより、学び合いを軸とする授業づくりを目指します。その際、子どもが問題意識（「問い」や「願い」）をもち、クエスチョン（W）型や、結論の根拠や理由を問う等の学習問題を積極的に設定し、見方や考え方の「ちがい・ズレ」及び共通点を共有することを通して、対話の質を高めます。また、ICTを有効に活用することで、問いに対する友の見方や考えをリアルタイムで共有したり、自分の考えを蓄積し振り返って評価したりする等、学び合いを推進するためのツールとして使いこなすことを目指します。

重点2 関係づくり

前期課程（1～6年）と後期課程（7年～9年）の児童生徒がそれぞれの校舎で学ぶ、施設分離型の良さを生かし、責任感や自己有用感を育てながら、前期・後期合同行事や縦割り班活動を通して、深く信頼し合う人間関係の構築を目指します。また、地域の方との協働、異学年との交流活動、自律的・対話的に学び合う授業を通して、聴き合う関係・「助けて」と言える関係を構築

し、多様性・個性を認め合えるようにします。さらに、児童会と生徒会の連携にオンライン会議を活用する等、施設分離型から生じる課題も ICT 活用により工夫して取り組みます。

重点 1・2 を支える 教育システム

① 義務教育 9 年間学習システム

体験や人間力の豊かさを基盤とした ICT 有効活用による学び合いの質的向上を教育課題とし、教育課程を前期課程と後期課程で編成する。前期課程での学習指導は一部教科担任制で行い、後期課程では複数担任により、生徒一人ひとりの特性に対応する指導を行います。

② 地域協働システム ～「学び合いの里 八坂」と共に歩む～

学校運営協議会との協働により「地域に開かれた教育課程」を編成し、地域と共に生きる八坂の子どもを育成します。

③ 教職員研修システム

前期・後期課程の教職員が授業を相互に参観し、子どもの学びを語り合うことを通して、授業力の向上を図ります。 ※「村瀬公胤先生（麻布教育研究所長）授業クリニック」

(3) 特色ある教育活動

- 少人数構成の学級を基盤に、全ての子どもに学ぶ権利を保障します。
- 山村留学発祥の地の伝統と今日までの取り組みを大切に継続します。また小規模特認校制度も生かし、多様な他者理解の大切さが学べる学校とします。
- 義務教育 9 年間で心身と学びの発達に着目して、前期（1 年～6 年）・後期（7 年～9 年）に区分し、2 つの課程で構成する義務一貫教育を実施します。
- 前期・後期相互乗り入れ授業を行います。前期課程では一部教科担任制。後期課程では教科担任制とします。
- 前期 5・6 年生は、せせらぎ校舎で「学びの合宿」を実施し、前期・後期のギャップを無くすと共に、対話を基盤とした学び方の質的向上を目指します。
- ICT の有効性を最大限発揮できる学校運営を目指します。「体験や人間力（創造性・発想性・愛情など）」の豊かさを基盤とした ICT 有効活用を教育課題とし、学び合いのためのツールとして、集団づくりにおいては施設分離型の連携を高めるためのツールとして活用します。
- 生活科と総合的な学習の時間を核とする教科横断型カリキュラムを作成し「学び合いの里 八坂」の豊かな人材や伝統・文化・自然環境に体験的に学びます。
- 学校運営協議会で学校運営の方針を理解していただいた上で、地域学校協働本部による学習支援ボランティアの皆様には、今後もより良い授業づくりへの支援をいただきます。
- 質の高い学び合いによる授業の具現として、問題解決的な学習を仕組んだり少人数の良さを生かした「思考ツール」を活用したりしながら思考力を高め、社会との関係を明らかにさせていきます。学び合いの質の向上のために、村瀬公胤先生（麻布教育研究所所長）をお招きした研修会も継続します。 ※学校運営協議会委員にも参加依頼
- 少人数の良さを生かし、手作り給食を提供してくれる八坂共同調理所の活動と「食育」の取組を今後も大切にし、健康で安全な生活をするための自己管理ができる子の育成を目指します。
- 「キャリアパスポート」を活用し、「将来の自分を見通す」「現在の自分を評価し振り返る」活動を連続的に行うことにより、自己有用感を高めます。

※「ICT」・・・「情報伝達技術」(Information and Communication Technology の略)

IT はコンピューター関連の技術そのものを指すのに対し、ICT は、技術の活用方法等も指す。教育では、IT よりも通信によるコミュニケーションの重要性が強調される ICT が多く使われる。

大町市立八坂小中学校 教育課程【概要】 施設分離型6・3制

生涯にわたる協働と
新たな価値の創造へ

前期課程②（4～6年）

- ・「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることを通して、自尊感情から自己有用感の基盤を構築
- ・ICT末端機器を操作する基礎的技能を活用
- ・教科担任制による学習指導
- ・「学びの合宿」を実施し、前期・後期課程間のギャップ解消

前期課程②（4～6年）
そよかぜ校舎

「学び合いの里八坂」と共に歩む
教科横断型カリキュラムを作成し、
土・伝統・文化・自然から体験的に学びます。

後期課程（7～9年）
せせら校舎

後期課程（7～9年）

- ・進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得
- ・前期課程の経験を生かした協働作業等、新たな価値を創造するための学習の場を設定
- ・複数担任により、生徒一人ひとりの特性に対応する指導
- ・「プログラミング学習」等の論理的思考と機器活用の技能向上

前期課程①（1～3年）

- ・「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることを通して、自尊感情の基盤を構築
- ・担任及び学習支援員等とのTT指導
- ・ICT末端機器を操作する基礎的技能を習得

前期課程①（1～3年）
そよかぜ校舎

「広げ、深め、高め合う」学校
対話的な学び
多様性・個性の尊重

